花よりもちるあはれやきえぬらん枯野のすゝきみる人もなし

みやまのゝ山人も雪のはかりまよふもとの村[illegible]里かな

（新古）わすらるゝ[illegible]人もかよはぬ道の庭の雪

をしのねは[illegible]霜のうちにもきえぬらん[illegible]

[illegible]夜[illegible]の浦[illegible]

霜さえて[illegible]の[illegible]

ゆくとしを[illegible]

戀

[illegible]

[illegible]

あはれとて[illegible]

[illegible]袖[illegible]

[illegible]人のつらき[illegible]

[illegible]

まどろみて[illegible]

はかなき[illegible]

[illegible]

[illegible]

雜

上西門院の女房法勝寺へ花みに侍るとき[illegible]

京へ出たりけるついてにふとたちより安居院のりんへ渡りて
しける番

花見すとききてふ心のうちにうかふるたに昔よりは道ある風

太后宮にて澄憲僧都の説経しけるにききて二番
中はうくしける

きく人のこころの中にふかきをも明らかにこそ渡されし法のまことを

如法経書て侍りけるまつりすとて人のもとへよみてつかはしける月

明日待つすふ入るかたの中ときはいまはおもはぬくらの花も

月前述懐といふことを

天のはらふりさけみれば月かけも心まよはゆくてまてもゆく心かな

猶かく人のこころこそあはれなれ人の月

雲井にもむかしみなれし月のみや旅のそらまてもとめゆくらん

西住法師こ海のほとりにすみて西行法師かもとへつかはしける

みなとまてときくそきまて袂かれしこころとそもわりなかりけれ

月夜ひとり入て常盤人のもとまてまかりぬとき
てのちいひつかはし

入さふかくいひつかはしものの哀さへ山路のすゑも渡りて
まとふうちなる尾のすみの月海のほとりたえすそ思ふ

ふかくおもひてかなたのみちわかれたるのちにいひつかはしける

志はすのころ世をすみすてかたき人の心のうちはむかしなりけり（しるす）

ある人に法文百首をよみてわきて送りし後に

深き心をしるへにて持戒の志をもとめ侍らん人は深き心ゆるしさへもみましや

何よしとかくまよひて松にまつきう宿る

松の世の為はにたとへは花にも我にきえのの梅がもとなる

舎利のこころを人々よみしに

あはれにも深き心にかはらしとあらしのさ月

涅槃会の日人々すゝめてこころよみけるに

すみなれし世をいとひて露にまよふる風の中のあはれの道

天王寺へまうてしにこれよりよみける

心ありてみなもとしもなきにならぬまの言葉の花をちりなへかしもあらな

諸行無常のこころを

みふの古ひともなけれはおもなきまにてらすか上露の露の雨

常住霊鷲山のこころを

かれはてしおとのあやなくも影つきなしと思ひけるかな

仁和寺の法印の為山すまゐのはるまへりしに九月

十二夜に月をみて詠しける

あはれなるむかしにも似よ月の光袖のうへにつ

述懐のこころを

いつくをの我身にすみしかくれかをよく山のおくそゆかしき

無常のこゝろを

あさからぬ秋はやまさる浮世なれなかりまさる今日をもしらぬよ

みし人もかくれにしあと雲に消たる今年有月日あらん

人のよみたる歌やあるとてこひけるに

出りのまちあ観れ世の罪もふすゝれはさちそはいのさよのま華（なりよ）

今入撰集漏家集歌

たいしらす

千　世中はなつ枝きまおかおちゆゝ中ゆす月にいとゝ花のさかりはたのまし

同　みちのくれゐのよあらすゆ古ひつゝ多のい出しゝ通のかす（かけ）

炎盛久不燃といふこゝろをよめる

同　たかりもえつきたるひけるもえ山てら別のかすみるもえん

悲鳴呦咽痛恋本声といふこゝろをよめる

新勅　まよひておたれ小蔵のふるになく麻いみちもすゑおのかなさきを迷ふしく

十如是のこゝろをよみ侍りける

本末究竟等

千　もとすゑあるよの花の一枝はよそもおなしくあかくくる延み
てゐにしまてそ

同　はらくもむなしき空にあらて入あひのかねは袖ぬらす
八月十五夜よみ侍りける

（琵琶殿）あふめて紫のなかんとおもひすてしひかりおなし月なかりける
十戒うちよみ侍りけるに
（同）なかのまよりの戒に不慈しちる彼の人はよのさかにすめる月影
十戒歌よみ侍りけるに不自讃毀他
（同）かのみ法人をそしる世はいさこそ人のこゝろむかしもなき
秋のころ
（風雅）あはれしる月とも見えす麻の衣かれのこゝろは晴るも（きこえ）
ときさよのみちをそへのかくて崇徳院へまゐらせける
返歌
（同）かくはかり身はなれしむすへもなしかさはり花にあふらむあはれへ花
崇徳院松山へうつらせおはしましけるに侍いてまゐりて月の前へと
数へつ色のはしらさせるあまりの哥とも先る
（同）みたるまも後もはかなきみつの奥まもこそあれまもなき
さりとこあると申る比
（同）清くこの雲を払ふかうて行の月もきはなき声
か名をもに世になむにあふらんとなる人そなき
おもひやるかよそはそのいそく
よみ人しらす
（同）はかなさの思ひしるのも世の中にさりてもおもふいのちをたのまん
そへし

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

同
おもひ入心をさへはゆつるまゝあたこのよ城すくさゝ雁南
迷懐乃ちかくる乃成よの光る

同
ちすふ末と残る山の心をまくはなく浮世をさそひくみちあるけ　平舎
驚しらぬと

稲つみの光のなかに稲乃あまひく末葉の霧のいろ乃は

相空法師身まかりて侍りけるを西行法師もとへ
侍るなれはあはれさにみつはかりける乃中まか
いかゝせんあとのなけきはさもあらてひとりまよはん人乃ゆくすゑ
返し
なき人をしのふの夜のわかれをはあはれものをそなけきかれはそ

大原に住侍りける比藤原為業まうてきてなく乃事申
てよみてはへりけるにはしくまうてきたるに申をこそ月
めつらしき形にてわすれやかなふれはひつかうまつる

新千
侍えうろ雲きる月乃やとらぬ旅よりまかせすむひとよ

普賢経　我心自空罪福無主

新拾
かつきみの池乃はるかにてれよもかゝとなる乃みか

妙音品

新後拾
ふかのえ乃月のあまはいつかひてすゑ山ふかくて来よ
十戒さうつくるもときまうてよの光る

同
いきみ乃世のならひきけて身のうさはなひとつる宿やけしき征

提婆品のこゝろを

新続古　をさなくも波のみやこをいてしより[illegible]袂か

身雖遠離心不遠離といふ事を

同　わしのあとあひて[illegible]みち[illegible]人と[illegible]する

人々すゝめて法文百首歌よみ侍りけるに二乗但空智如蛍火

新古　みちのへのほたるはかりをしるへにてひとりそいつるゆふやみの空

菩薩清涼月遊於畢竟空

同　雲はれてむなしき空にすみなからうき世の中をめくる月かな

栴檀香風悦可衆心

同　ふくかせにはなたちはなやにほふらんむかしおほゆるけふのにはかな

作是教已復至他国

同　やみふかき木のもとことに契おきて朝たつ霧のあとのつゆけさ

此日已過命則衰減

同　けふすきぬいのちもしかとおとろかす入あひのかねのこゑそかなしき

弃恩入無為

同　そむかすはいつれの世にかめくりあひておもひけりとも人にしられん

聞名欲往生

同　おとにきく君かりいつかいきの松まつらむものを心つくしに

心懐恋慕渇仰於仏

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

同
迷ひし心は昔をのみ思ひきてよすがらもみえよ山のはの月

十戒哥よみ侍けるに不殺生戒

同
わたつみの深きにしづむいさりせでたもつかひある法をもとめよ

不偸盗戒

同
うき草の一葉なりとも磯かくれ思ひなかけそ沖つ白浪

不邪婬戒

同
はかなさをよそにみつゝも衣にきるゝかねほかのつまを重そ

不酤酒戒

同
花をかりし霞のをちにけふもあらし酔ひをしもかへて春の山かせ
ならしつゝ

あるしはさ世をのがれてのちに東山に人の許へ世を心しあまた侍

相空法師ありけるもとに西行法師まかりて侍り

はなをよみて

續後撰
見るまゝに山の遠乃庭の露こそ蓮のうへに玉とみえける

西行

同
こゝろをも世にとゞめねばうつりゆくはなをこそおもふ庵
うれしかる

寂蓮法師集

五首　左大臣家會　春

近いそ雪丸瑚の梅かをくまゝに乃中おゝて霞たなひく

夏

いふかくみるも卯の花と神垣にほとゝきす鳴玉河乃さと

穐

小簾あく暮の秋光とも出し侘ふしまゝ又あまるの月

冬

ふる雪よ新くぬてなは深山来もさえる橋手あらし吹なり

恋

いまは我うつろふ限とおもふともあかれぬいろはかはらし霜をそ

殘菊　小野會　公景勸之

煤の衣の夏のれ宮まみし月の影さへうつろふしら菊の花

時雨

神な月しくるゝよるの寝覚にはいふかひもなくそれて披の板屋を

嵯峨に住けるに九月くるゝまてあそひし地程に世に

ちらぬ世の吹てよの紀の扇たのむらかくなる歳月

をるとことに嚴法師へ申ける

我屋は朝のいぬるすみ住侘ぬ世のまゝにくらすなかむるとも

遠し

なにゆへて世をう治山といひし人の跡はたつねて喜撰はこそあれ

九月つこもりにはかゝるあなる備乃国へまかりて侍るに

ある人のもとへ十月一日のあまりそへつかはしける

とまりぬる秋のなれもをしまて猶の葉ちりけるをもと知る人もなき数

二条院宮白川にうつりて住給ひけるに祝のこゝ

ろをとはりしよし書付よといふかたるせけれは

水上の住する宿も白河のあさき流れの末いくよひさしかる世

隆房卿別当の時数の政あるゆくしにありた

おほせけるとき七條乃市のちからをもて追を

されとも上の二条四条のあはせつるけるをみてをわかるれは

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

おくよりゆるさるゝをはせて人よみてをくりける
いくへの跡もなほひかけの池にもさその梅のかすむよに
返し
いくへの雨もふる梅はかはらぬいさやん限あらは見る
出雲の大社より下向して侍けるに尊宗申遣ける
かくそありけむの代をさすらへていつはりとゝまる八重歎（たむイ）
うへし
きゝてたに八雲のそこゐさる緒哉名をあふくなる
廿五日夜の作会同季恋
北野の神をしのふは昔よ我ならも新場の梅は飛梅もとめなる
春風にまちもおくれて梅の香そ吹ゆくかほの梅のかほる

権別当（花云）
當座夕落花
まち咲る木の間哉つてひきて花も嵐の舞ゆく小景
内大臣殿座主にて十首続歌合あまたへしゝて
薄暮村花
神なひの風も子斗に霞やそて春風あらぬ玉河のさと
暁更霜橋
夜更のこほり風ももらぬへし花橘の昔のとに
遠山郭公
なかぬまも声そかへてぬほとゝきす高山は雲のよそにみゆらんかた

風前夜荻

秋の夜も人の袂よおもふらん荻はなひきてそ志のゝ小篠

蟬聲夏深

あさかせも日かすふりぬる木隠の松のときよりや蟬なかるなる

螢火秋近

いたつらに一秋半や夜半みかくとも飛螢の光

後白河院にて述懐せさせ給ひて二首年九後左府

御供花の時六条殿にて池水久澄

せきとめたくなかれをたえて池水の千代まて末も住むへき

郭公述懐（述懐）

みな人の波のかよひなきさすらふ跡花の跡かさぬらん

秋恋在野外

名残ある秋の野原にまよひ出て跡もなき路を

被訪客人恋

から人のなれぬなかめもはるかなる風にふかく見ゆる名こそあれ

閑居聞虫

志はしまて花よりあさきいひなしあさましからぬ虫の声かな

旅宿鹿

秋の野の旅ねに風をしらぬ袖しらぬ旅たつ佐保鹿の聲

紅葉淺

こゑかれし松の縁もまさりて我京みなか猶よ色有まきなり

山路霧

あき霧せく秋の庵の名残りなみゆくあまたの雲のはれのきて

擣衣夜深

帰しらぬとなの手枕は衣うつ門

民部卿歌合山花

まつ枝へ山下りせのへのまたも散りしかはゆくこそ花の雲

初郭公　同會

あくるまて人まちかねてきく里はまたちかき杜の一聲

深雪

我もゆき人もかよはぬ道もなき雪の跡のなかなか山さと

夜思水鳥

谷ふかき衣手かせかきまよや松かせのおとのみ小埋むしろのこゑ

深夜千鳥

すまの浦の波のよるかし衣かさねて鳴る浦路より千鳥なく也

故郷初雪

ふるさとは花も昔に散ぬともやよしのゝ里にふる初雪

鳥羽殿作遊和歌御會　建仁元年四月

藤さひ人もちひかまちつもるなかさきのもみせんことも世のあるを

雲　塵主報恩講

夜はすのをにかはくまもなくて秋霧にやとる袖の露かな

照射

清ぬらや千りの我麻のにかへらんとや海手すその葉つくれなと

泊

ゆきかへる文殊の廣に着てもむ漕よりる事の便なりては

末の頃あけはなれなまかくて手越といふ所にて

おもてこうしつの山路よそつゝもるや何ましよ返へつく覧

仁和寺教王院にて梅花夕日といふ事を

あかねさす三室の山の見るらつふく松かきのみやの宿の梅の色

東の方より帰りけるに十月許閑居虫

よそにのみながめぬれはか出る月影も秋の末の庵なるらむ

海邊見月

清見かた入日に秋そら海てゝ月は須磨路よりも明石の浦

絵浦浅見にまかりて

名にたかき恋しの浦の磯をきて見れは波もうちよせ浪そかゝる

旅宿虫

暮まちし花都をなにこきとのかへにまつなく秋風かまくらん

宇治山荘摂政家といひし所にまかり
ける秋の末也

あらし吹峯の庵路もさえて月のゝもうけむ宇治の山本

東のかたへまかりし旅なる人のつかさなる女に宿を
かりけるをきゝてかの地にまで人つかはしける

おくれそふひよるとは都をいでてかやしきあとゝやならん

かへし

はるゝまでこえやしも夢の中におもふなみだは夢の枕のみだる

霧中時雨

神な月ひまもる風の霧こめにむせぶは袖のうへにしぐれて

故郷雪　前大納言為家

たかまとの尾上の宮の雪のうへにあとつけしむかしはてなん

山家雪

住人もなき我宿はふる人の跡絶はてゝ山風のみぞ雪のかよひ路

雪中遠望

をちの里のあたりやなにしろたへに遠山までにふりつもる雪の積哉

家隆卿時なきさまにしてさそひつかはしける

すまひするも袖にたまりて雪まけの夜の嵐はまさるらん

かへし

すむ程は我はみだ若の袖にも涙はたえぬ恨ぞまさる

彼よりかへつゝかたかたはしける時

冬ふかくすれるあとは春の枝さそふ風のさそふ夜の衣かさねるも

返し

すゑつる浅みて風海の浪まれかとさ月すそらてあまと風ふ字

水鳥　前宗乃哥合

風てさしの湊にねるかもの羽音ゝも浦つてひとか

網代　同

風ふけはあしろにひをこる紅葉の下にゐる里は浪のもみちは

定家かね歳とをけるにこそ三日をてよ

るとひゆへきよしとひかるかゝ雪の朝ゆ伴のり

たなけける定家卿

三笠山ふみくし白ゆう待かとゝ花の雪そ人また跡もなし

みえし

春日して路をとふきし三笠山さやや雪かきはらふ春の櫻す

又まよひよるしるへのつけゝる

袖にもふかはそてすへきうれし我身のかみそ身のまもる

立秋　左大将家哥合　當座

おほかたの秋くるからによひや是かんたまきし露も袖にをきける

同家十三首内　泊瀬花

こゝも又ゝ梅の枝村りてし花に分入小泊瀬乃山

宮城野

こ深野の小萩か露もかもしく露をそかれはみゆる人の袖まち

須磨関

月[illegible]すまれ露[illegible]海士乃袖[illegible]

深草里

秋の色は[illegible]そむる[illegible]の草里

清見関

みやこ[illegible]月や[illegible]清見か関[illegible]岩の細ち

野草[illegible]近　式部卿[illegible]

秋の[illegible]萩[illegible]社[illegible]

藤二位季経[illegible]の[illegible]の[illegible]歌集

又寺[illegible]あつめて[illegible]紙[illegible]て[illegible]

経の[illegible]しけるに普門品[illegible]歌[illegible]

あまの[illegible]葉[illegible]書入て法の[illegible]感[illegible]

納涼添述懐

いかに[illegible]の[illegible]のあるし[illegible]すゝみ[illegible]

水辺惜暁月

夜[illegible]て山の井の[illegible]秋[illegible]

暁聞郭公　鳥羽院　五月十五日

夜[illegible]の月[illegible]入方[illegible]山[illegible]の一[illegible]

松風[illegible]涼

[illegible]秋[illegible]のかん夕[illegible]松[illegible]

遇不逢恋　[illegible]歌合

里はあれぬむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そ吹

已上三

季経卿三位して侍けるを人々悦申すとて遣へ

しつかはしける

こゝろはいさゝかもまた位山昔よりこそ思ひしを猶あふ

くへし

老の世にかゝる人ても数まへてぬる山とりの名はいつこにかある

中将公衡三位して遣て侍るよ侍のつけける

君のためうれしきと思ふそうれしかる遣けむ人きゝて花のそこの

返し

ちとせふる君の世まては君の世をまつひさしきにあはれなるかな

文治六年三月十七日厳法師のもとより遣

敷島の道ひたみにやすらふ寺の花さそふ風も心しく花のあさなる

くへし

春るよりしらさりし人のゆきさきの世をしらぬ身のはるはむかしは

重保うとあはせて一品経の勧けるにすゝめける時房か

まゐらする人々すゝめてまゐらせ薬王品

夜な夜なの身を焼けるにける光こそ世の中の海のそこまてそしられ

院御会　山家暮月

ならはせてたのむ心の月をこそ世をのかるるとおもふに世の中のさか

雨中萩

しつかなる雨そ風よりつらかれは萩か露の萩よ雨さくらは

舎利報恩講　雪中聞法

鷲の山見えし昔の跡の雪ふみ分てきく法の道人

範玄法印高野乃別所にまかりて侍る春よみ侍はうらしける

とほよりも高野の道援ちとわけの梢をもきかゆみる哉

夏草籠水

風吹てなひくまこもにしけれは葉末にかゝる庭のやり水（さゝ波イ）

白河乃もちつりけりな人もかなわけゆく風あらく吹て花誘ふなよまゝの花乃下露ならまゝは

なつかしき人は都にあるを見て此のこゝろを尋よみける師光入道乃もとへつかはしけるを人にかはりてよみける

哀よりむかしのあはれ敷まかりて契りし枕也けり

帰雁

又もこは秋をまちえて帰るとてやよやとゝむるかりかねあめく

海辺霞

藻汐やくもまよふうきしまの浦をもみわたりて霞の山よ名を命乃周防とまありて霞めてみる

小余乃ゐ根まくらこよひそりはてしくの絶

有乃原

おとに葉すゝ風よ人ともはすてむすゝ我は世のあらゝ雲

庵主乃坊房数恩蘇

近江乃山大乗院景宗重山は枕の下湖へ

麓なりけり

月さやのゝ波の千里もかゆきて枕のうへに夜は明の空

同

本郷子に　こゝ萬さへてたまはりしに去る程もと野道の文書

殿法印九月廿日山内乃ありて在まゝの辰書て

香をつゝみたまひける十念歌和尚へまゐらしあまり
けるとて

おもひねてそのひをとこにする人をもうらみ山の杉はむかしゝるらを

返し

しそへなのくみか山の杉くものも速て嶋の露わけ達かへりけるまて

末

後乃風も山へは嵯峨也いつか如年は秋そゆるらん

返し

すゝむしかゝに如来の道といふ人くや野へをはすてゝ山に鳴らん

本

大嶽のみまほりせずは霧のたちてるみ山に月をさへぬ

末

山のくも又あるひとよきたへければこそ月のくもかゝるらめ

本

をくつゆの色のかはりぬさかきしの宿者をまてる人もかな

末

霜山こゝの葉つきまた葉はこもりにこそ君をいのらまし世

本

きく袖の露のふるとも君が緑（と拾）山のすゑ風のつらきみなもと（としつ隔まん拾）

末

さゝの隈ひのくま山（と拾）山風ぞふきわたるいつくしき袖で露もさむけき

本

かゝる月に桜や花はかりにいふにや散りてもまたの梅をもしのびありけり

末

おもひ淡なる花の月も霧ぞけふなりける世の秋のいまにいたるも

本

麻乃狭衣今まであれる山の世をも猶乗にきてやとふ雲人

末

ふゆの夜はちとせはかくとあかずつる人きそ世の根をふる雪の霊人

本

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

稲すゑ人さへみぬ山のかよふるみちのゝき我をるよしかなへて
ける

うへし

春かすむ岩ねの松の月をその言の葉ふきよする松のあらしかな

本

うきことのおもしろかくすむ山の雨のみなにゆきとかへて通也

之へし

かきこえしに西坂本にかくれ申よし聞えけれはつかはしける

本

法の水深くむすひしその世をかへるへくかよふおもとの山寺

えへし

法の水つきせぬ流絶なへし共に絶入て山の法に住すん

東路や越つる里の跡まてやけさあつさ坂の雪にむすふ清

花も見る岩ほこそあらめ猶えのかさしとしのふむかしのこゝろかる

よそえ来りこゝろある谷の岩清水いつしかまたは日影なれん

春の月の色もかすむ山里に梅か香まても通ふるいろの花の色

依所先度百首

心の雲のかゝるみ山のたつ杣まては都の月すむらしか

百首を許しける時

志賀の浦やけふ入る方の嵐にもなかなか袖もことゝひよ世

影ちりし花を我身のおもひきてそ絶ぬる夜の夢の世かな

夕霧の立迷ひ行空に雲間のもれ来人の色かへて霧も晴行秋
よそにきく峯の嵐も萩の葉末の里を過ぐなり夕暮の風
かれ残し小萩がもとを秋の色に染てそめとはおもひけり夜
（新古）野分せし小野の草ぶし荒れはててみ山に深きさを鹿の声
のへをるさびしよるもかな枯て雲まにふかきさやけき明月
雪晴て遠くにみゆる山里ぞなかまおそはやしき人なき船
あれはてゝ山路の雪と霞とも立そふ里ぞ我もとなる
みな人のつねも深しいとて氷ぞの里を君の袖にもきて
袖の上ほしかねつゝも露やいかさまなんしのゝめの秋の下葉
山のはをいつの程より住なれてまよりよるまて晨明の月

今はとて雲の八重立おくまてもあはれをさそふ山の秋
すむ人のかよひぬ宿は跡もなし庭のおもなく籬のかそた
住よしの松山つゞくあまたゝびはなれぬ波に松風ぞ吹
浦ちかき山路の末に日は暮てかすむ泊に浦風ぞ吹
霞はる吉野の山風に雪ちるとても花は人まつ事を忘て過にけり

詠定五十首

かへるさに雲の浪路に数消て友をさそふかあまの釣舟
夜風月になぐさむ袖よ我手枕にはあやしき袖の物かせ
あま遠けり嵐の音まては空にしもとよりつゝ庭の松の末
夕暮はつれなきつゝも隠るは鷺鳴て芦の夜寒にしるやむ川辺

ちす世ふるまへかくれよりも松とへさらに暮乃ちこそ当

君の代はさかゆくちきりを家の中に萬民の朝日の光さしそへ

庭の面とをしはをさして侵ねよ二層まてこそ久しかるらん

多雲に雲すまる世のへて君をそまちぬる高砂の一層

御所哥合十首　月多秋友

新古
高砂の松もむかしになりぬへしなほゆく末は秋のよの月

月前松風

同
月は猶もらぬ木間もすみよしの松をつくして秋風そ吹

雪似白雲

あらし吹峯はいつまてしられきて雲のたえまに松の雪折

右大臣家花五十首

松ともせ花はさらまた残るむさきを消まみへつゝ白河の関

まさ移するゆ右れ松よの波ならはまつ植もせ花を月我

月影はいくらか花く霜をて蝉の声松乃本の北

左大臣家十題百首内

新古
かさゝきの雲の梯秋暮て夜半には霜やさえわたるらん

同
はひしきかりすみもとるも松そよきの桂に山の秋のゆふ暮

外山なる木葉かくれにほのひきて風によはるひとむらの条

朱ふつ雨の庭のかこつ世の角丸あるまて露そ乱そそ

新古
紫の雲路にさそふ琴の音に浮世をはらふ峯の松風

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

あはれやはうき世の外にありなんものゝうきそのゝ内家なくを
すむ月を玉の梢のなかにてそ法のゆくえに立ぬる空

歎伏哥合　縁あるすゝめしける時讃歌

むさし野の露をそへ袖にかく侍ぬ萩の風たゆみに秋やきたる吹

柳拂水

龍田川しのゝ長柳ゆく水に数ふくみかはうちの枝ぞなり
山のそゝ分ゆるまにあか逢て霞をこ吹ゐ松の山立
梅かゝに色ふかくのこを吹風もこゝろある逢つそ香もさそふらん

左大臣家百首歌合　雅雨

小萩さくゝ山のけふひもしらしれぬ鴫すたちとまるもしる雨の空

方
あまそのさひの車れ数ありて見る逢を疾れ物なれる
涼おしやるふさのさひのきらしも東露実あへしも果いめゆれん
春遠行松のみとなるものあまて逢てあらしにみゆるまゝの紅葉

貴賤更衣

人なみに賤か袂のかへるは花のゝなる色は有さへ情かれ

賀茂哥合

千
世中は年そふとまて逢て名にしきひしらすいとくまおしやる
同
なほひ経の夏ゝなみて明か逢ハいつてもゐるのかみ社つかふ逢
同
ちはやふる神世ひさしへて世ゝひる枝きてへまつ松のかきのは

老若哥合

なかつきあさ霧の空は晴やらて雲にはいさよふ鴈のこゑ

新古 くれてゆく春のみなとはしらねともかすみにおつる宇治の柴船

よかゝさ子寒れてかへる袖にあまる衣手の露をおくらる

夜さむつき杜の梢も色深み洞まて露はおく池の辺の鶯

こひわたる音にそなれしおく山の高嵐のふもとにもれる軒の夕かせ

なかれ行くかすみかくなるまよひの月影にもはくさるものかは

新古 むら雨の露もまたひぬ槇の葉に霧たちのほる秋のゆふくれ

さひしさは誰にかこつらん小倉山秋のすゑにはかはる鹿の声（としのみなんイ）

しほれつる名月のよも袖ぬれて山陰さむき菊のしら霜

山のはに入日もあかぬむしのねを色おしは月も霧のまよふる

已上十首御所老若哥合

うつるやとしはし月影もとむれは露そかゝる朝顔の花

あら磯の岩にもゆる立浪のさましくてそ名残る袖のなみ

里とよむ市の中にもなを人のすみなれとも深のそこし

淺茅生にすむ池をとなれ蟋蟀も隣しあはれをそきくそよ

柴の戸我らくしてあくるも誰なれかさひしき遠てる峯の松をも

なをてらす人とゝもむる里の犬の声すむ霜夜は更まさり

已上同位法師勧進

雨後白菊

立田山あとゝめぬれはしくれ遠楮のみちに菊は見えける

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

山家送年

（新古）たち出てつま木おりこしかた岡のふかき山路と成にけるかな

已上　右大臣家句題百首

冬月夜は苔の下ゆく谷水の山とよりまて日数ふりぬる

大井河ゐせきの水やこほるらんくやとなる浪の聲そきこえぬ

（新古）和哥の浦もと松の葉こしになかむれは遠よりよするあまの釣舟

已上　大輔勸進百首

春水

鷺の渡のはらく数なるらんたよるそはみ雲の山本

寄雲恋

人しれぬなくさみにこそ雲ゐまてたちゐるかたも袖の色つらん

聞恋

いかにして露ちる袖よすかやつらんまたみぬ里の萩のうはかせ

祈恋

貴舩川百瀬の浪もわけ過ぬぬれし末の袖代かはるまて

已上　左大臣家百首歌合

資盛卿哥合

花の色も月の秋をも人しらぬ葉の色にそ見る月色のそら

左大臣家哥會

月しらぬ人伯母捨山の秋の夜をなかめし宿はさらしなの里

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

或所歌会　鹿

麻乃あふかおもひとかゝる秋の夜はねによるしかも物をこそ思へ

秋乃暮つかた小納言定家かもとへまうでて物申しけるなかよりあひそめし後のちは松虫のなき侍りけるを我れみ歌はいつよとたつね侍りしところは嵯峨野の方よりまたもむさしのひとつる中をまいり帰て又の日さうしへまいるとて故郷乃こと云侍りけるかとて侍りし△ひと聲へのかたへひらはしまさん友をとひ侍りて松虫乃聲きくへし

いまそも都の友我松虫乃なくならかをまつて暮かよひち

九条前合　雪

あるじそめるとも秋のへのまされわたる深山風の雪の夕暮

十月廿日東乃方へまかりけるに箱根と云山をこえしおほえける所乃ありかは根のむしくよみ常にかゝる所のはるかに小舟にのりては海をわたるなるになひきたる雲をとほしてみるそ風に木葉をまきてあらそてふく道乃紅葉よるものゝ道は遠待るたひの空雲をつむさま我なもし時風は袖乃下よる日を結

冬前乃中より九重を

おちのけ椎乃下葉まつ遠てみる山乃里に変つる哉

右大臣家歌合　夜恋

（新古）山人のあさ道ハ袖に霧をほすともいくよやあかぬ世を人まつ

同家歌合　秋恋

大方の秋くるよひやまさるらん人まつ宿の露も袖ハまさりけり

出雲のきつきの宮によりつまもりはゆふも河の過
まて中

出雲川ふるき湊浪たちかへれはあまりふねての浦霞

日吉社会　社頭祝

度々の君か恵の庭におほ葛の末成も山を神やまもるらし

後白河院かくれおはしまして後の年中にて哉

経房卿によ経すへきよし彼信縁にすゝむ支
とゝ歌度て彼卿のもとへ申つかはしける

いにしへにきこえし花の香入月のあとをしたひてゆくへき身をや
うへし

たのもしき我身よりそ有明の入らん月のゆくへゝのもみちまてそね

嵯峨乃釈迦をおかみたてまつりて

まことの山にてひかりはれけれそさかの露によるにしの月

民部卿経房吉田宅多賤服に無量義経十
功徳品文云是経諸佛室宅来去至一切衆
生發𦬇心

すゑひつゝきぬ教の法乃も我らく未は雲深乃神

秀量忠

東屋のまやれ板まにやとるよきてかるよも仮寝露せす　弐

百首哥めしける中に春歌

志賀の浦や鞆とかゝるれ袖まて渡る浪路よほさすよそう

建仁元年大内花盛に臨幸ありて花乃下にて

御製

雲乃うへよ春迷ぬといふこそ迷ともおほゆる花乃新しさかな

御返事奉るへきよし仰ことありけれは

いくかへり雲井の花もおもひなれんなれし御幸のあとをしのひを

世の中のさはきなときゝて左大将實定

世の中をいとひぬへしと津の国のあしまよふとは思はさりしを（もと）

うへし

人はみな位高かの家をも世すてゝ遁もして

保縄のかとのまと明石もすまさぬかせやうしことはと（もし）

いまはそれを入道素覚に出して変をなとか

きこゆ

初めやすみの浦風身にしみて人目かくれに身をなるなれ

返し

おもひくれ跡をみるにも涙のみさきたつよはなけきをそかゝるれ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

圓位上人熊野にまうてけるに正月十日中向ける（全）
つねよりもつゝしみける女のなくなりにけるにおもひけること
拔萃にあらはれたることゝかきて
霞しく熊野かはらをみわたせは浪のおとさへゆるくなりな
りけし
かすみへにたちかへるなる風のこゑまよふともおもひやるへき
菊植しとしの比少将公衡朝臣かくれ侍りける
なかひきや宿の数の霜なからむかしの風すまぬかりにあらむ梅とも
又
故郷となりにし宿は風のみそ霜いたくとも宿りける月（秋の月ハイ）（歌ハかくし）

人丸の墓所ありときゝて柿本の明神にまうでて
古跡ありときゝ昔の下まてさえわたる末の言の葉かきのもとまてや
いまさへてとひをく墓所ありときゝてよみ侍る
おもひ絶ぬ末にあらはひきならぬめくみの行末まてを
高野にまうでゝ籠りけるところ教長宰相入道殿
小野にいますとききて頼輔卿とふらひて
ありけるに程なくかへりまうてゝ後彼山よりつかはしける
よしほときゝて侍りしにつかはしける
まつ程そいふに小篠ともかりにたはれもかきつらふ山の雪もしらく
又

たのみこしむかしきこえし雲の上の人をこひしき[illegible]

桜井の僧正か遷化侍て後年久しく彼住房にて

山里をとはるゝ世にはよもさひしくあはれそく

庭も面のまへも秋のくさはらとなりはてゝ侍るをよみける

住馴し庵の苔も跡のくさとなりてそ残るはあはれなりけり

梅津園の葛屋といふ所にてあそひけり時節引

の滝見にまかりて月出るまてあそひけるに

山の井の雲のけふりのよりくたる月さへ松河の清らけき

仁和寺法印 覚性より九月半に

まちかねて月をすみなる山里も今日は君の宿に帰れ

返し

山里の姉の衣はうちてこそ桂月夜は名に面をあさ

萬葉入道のもとより

逢みてしそのよの空の月影を袖にやとりし明の空

返し

あはれ世の人の名残をこそ[illegible]ても思ふらし山のはの月

三輪社に詣て侍しに社の杉に書付侍る

三輪の山あふ逢坂世に成なれん杉のしるしに宿を便せて

住吉小濱よりよみ侍ける

あら世には杉もむすひてすみよの松に吹くる風の音もかな

百首歌中に杜なる室と

年つきふの宮の杜のはかすを進手枝の滴やむすふ覧

出雲乃大社に参りけるに其作國に懐穂
侍るかくとまうでてあらしあるさへきるもしもすと云

つらそし　こゝゆ

いにしへの昔も出雲なりひもちかくへてそけるおやすみ八重垣

返し

出ひあれて隠つる霊もあらはれけり妻もこもれりと出雲八重垣

隠南鄙に渡りけるに舟中乃售水まて一遍
飯なまへて

なけ人のまかへらは入に濃ねとも舟中はおはかたにいかするも
出雲の大社に詣て見侍る道に天雲にえるすり
山乃たゝえもそかすきのみこゝろ南無世乃吏
とも見ゝ　さそさるす

やくもたつ光や宮にみちかん雲に立けん北のこゝろき
うけの思ひまかうちおもかく成て後はのこゝ
けふまほかそえね根のあまりうや世哉のまて
波のあや山乃葉に侍ひとさるちまちまく
秋の中も磯にまかへて浪のことやとく出雲へき
よるへ人中なとの稲にかかる出雲にへきと

てらの門のほかなる車の音もあまたゝびきこえしは
まちわひぬる人のとひやしぬる
とりあへすふすみの戸をたゝきてみすもあらし葛ふく風
かくてのち日比乃山庭の跡もとまらすて見しきれは
人の音も侍らて松乃ひゝきのこゑなむしつかなりける
よる風も音なきに松風さえてよるの枕のゆめもさむる
よさの海の氷のうへを舟とめて浦路もさひし浮禅すらむ

神祇

ちはやふるこの山をまもらしし神も君の契をきくなる
世をかはらねはいつもの末にて葉よりをひゝ出雲のいかしへのそ

萬代に松生る濱よりかよひて君のたのもしみよ吉神
ゆるしはてなは歌のうら波立ちかへりみもすそ川のみなもと
うたかたの今やそよそ此人の教なれは

古池菖蒲

荒はてし池のみきはもあやめ草引つる人そそすひける
あやめ草みかくれにけるなかそれてさもあるそ池乃にこるまて
菖蒲草をみひく跡そ流水に立殘したそまさりける

遠山郭公

よはのきりもとすとて時鳥深山の奥の雲に入ぬる

雨後夏月

さまかはるつの花まて庭まつ風吹きつる雪の名残を月にみる人かな

所々照射

いかてこのあさに我せこらんやまのかけ葉山しけ山

所々納涼

末は小陰の人やはらはむせく手にこそ影は山井の水

霞

春とてもちらさと都なりし一もとあはいとすみ霞かきろひぬれゆくなき

端午

人もまた淀野にあれてあやめ草世をも軒の菖蒲とそ見え

槿

有明の月まち出る日のそらにもえかつてはあさかほの花

閑居

菜葉分て庭にたゝむ麻のころもまさりと花友となる

晴

雲消る富士の山かとみつる世は猶東は庭の芝生まし

梅のみやひもいまは六月にさひのきえぬとかきひら哉

五月雨

淀をあをたらくみこし庭たつみ一すちにつゝく五月雨の空

名有の田に秋も脱の心水さへなれてうもあらぬ祝もかはらてそ

行水の更りて見ゆる雲のまゝかとみれは行雲をは河かくる

あま人よいかになかむる松しまやをしまの磯乃五月雨の空

五月雨にみつの濱松浪こえて猶よるかたの海のうら風

なく〳〵きひろ袖よひの山乃端に住もあらぬ月にそやく出侍り

夏ふかき世や神山の月影に空の煙によそて雲乃一つなる

鶯のなく葉代つもりて詠に世に雲ゐにあかれかたりすむ

将軍

ちよおひの松のみきりに氷よまとのるてうつにそうつるちとせの月

和歌二百九十五首

右寂蓮集以一本及流布本校合了

兼好法師集

東山よりかへりてあきたかに逢坂をこえしに

雲ならて花にまかふの都のあたりの名をたちれ花の雪る空

あさきの花をきそ吹かへる風のうへより春もにほちる櫻かな

雪ふる月にみをとゝむる光中納言のもとより

あとたえてとふ人もなき月すむ雪にわかれつゝみちはわけて人の香

ふる雪に里をはまよひ跡つけし待人のもとまちするかな

返し

跡つけて今そとふへきまつ人のなき庭の白雪

七月七日月あかゝりしと

天河みなはゆく月をおくるゝもあかせまけは雲のたちらくて
しゐこゝろし
春秋夜のころ風山によみことより乃歌をよせひをそや遊
無動寺にて夜のよあくるまで月見て
さとよの秋のさこよ山のたひれしてもぬれゆく稲葉乃月
ゆつりよ白雲のひてまかりしすき侍りし[illegible]大納言
さ乃くるほよりおこせひのあはせて
遊ひはへるとてつるみちにあそふ季君にへしとおもひおこせ
ぬらし
秋のたのひ御祖ねおくるをあさひくさ花をとひさはこいつかりわむ
ふりくるまかのひしこゝろあり月さやかなるすみを
衣に清衣の袖やとかるらん暁の露のふかくはなさと
深雪夜にてとしひとひに影
ちるきくのきくのなみひさしく清きまに出でしはむかし
左大臣家にて落葉風まさるといふ事を
あまねきて木嵐よりもみち葉もかくれぬ山下の
少将に侍りける君名くとおひ給ひにてみ宰相
たる人のかよりまうとひたゝせつる
いまめくるさてやとこそおもふ宇へみの成程のかおち也
あし

うき身をもとの道にやせまし心すみわたりのなる声のうちにもひゞきそえ
ほうりのたまのなかのたるとは人のさとりきてうら経なるん
ましとそよ

方便をゆふきてたなさひてさとりをひらんかたは大乗の松はせ

いろは哥

大内のうるくいろもあらは咲きても見ぬなるらなそむさ
をる月の家のすゑ結けるらこそやるゝ世に堂をしとにとはそ
君がみの月並のしるし曙よいろくの花咲ける帝
佛さまをとゝもつるらそ座のとこ霞むすくんあるした
わかきの数を知りて仏果に伏さんとられける事

おかしいそく
世の中は梅の花もと霞もしきまとりて今もたに山をつくる
なりふるをそよ世の常宿をうつそくれにゝも藤を
うへさきとくく
契りのあともそ花とさらぬひのもちなる八はあらわれゆく世の友ならくん
頓阿毎月抄ひて書のとあるる春雷とりて月つゝかう寸
はかなくてしるふかきてもあく雷風さうて法咲きて吉説
なしく
ちりまかひさかふ清さてう花のまよせるもはかなきたる清雷
やまきらむすまぬもやうらくらへるなることもを

（続後拾遺）さひしさもならひにけり山里にとひくる人のいとはるゝまて

とよみ侍りしことあはれにこそ侍れ

（続現存）おほかたの人のとかめし風よりもおもひすてにしよそのはるかに

法華経序品

いはゝものことのはにかつ法のみちあらはれにける花のさかりを

祭主定忠身まかりて後遺言に結縁経の歌すゝめ

侍しに方便品

ちりなへて法の種のみのこるとも春にあひぬる人もありけり

五百弟子品の心を

あさ衣かけしうらにはかへるともあらはれぬへき玉のありかを

中院入道大納言雅継白河の山荘にて逍

遥して歌よみ侍りしに寄恋と

ある人の心ひとつとなれる哉おもふにまさる思ひなりけり

八月十五夜報恩寺にて人々あまたの歌よみ侍りしに

まつ侍ともとゝまることとなりて今宵の月をひとりなかめつ

月かけをおもひおもひてなかめこしそのよの空をたれかしるらん

いにしへに大嘗会に實教卿

ゆくすゑの世をおもふ世の昔なれやさらに今宵の月をなかめて

すみしるやむかしをとふ人のたつねきつるかな

さらにまたこの世のちりははらはすてかさねし袖の涙なりけり

おもひたのめをねれとのあさぬらん人まつよはをいかに

女乃りくも世侍し

ちるまくもあすの契もしらぬよに我かすならぬ露侍る

きの夜あ世てる所乃ともなるはいつはりもせてなをす

き松のこゝろよりまたるゝなくかくるゝ月かけみて

あり月まて猶たのみ侍る人は

なかひいしや秋の木のまさそへて松の葉に風月もみえぬよは

世をすてんと世をひてちらしうき秋の夕暮に

めをさそへいつはりなのめまし頼のくれもこゝろ世はかなき地

らかくなのまなくのこゝあ世て

妻もをなみ我身のかけも世への秋よになきのかなしは

かひもあらてちゝ月へなかめてこそ代

よそにきくあはれもゆく世中もとへ地獄となる苦をひくらむ

なくひさしゝひさしゝやなくはなむ我身の恋つらきまことねえ

ゑおのゝきを聞ならふひてうちをゝる人を

はなのやなをも人乃こゝろなるなのかれね世代まて心なれえ

あらし乃山の花ちよさて

おもひ河くはかてこゝろ地をまあてや花の陰をさゝれん

むなしの人なる

みても我あるなのおもひつゝやも袖よりさはる梅乃下かせ

東風ふくとまちてふかさるまにほふるたかくふかぬに梅のにほひ

二月くつのひよりあひくしこのもとにあるる比雨ふりける哉

ありしよりは雨まさりてもみちにしも世をすてしにいてなみのあきひとてをしまん

かくし涙はいつ我まゝともおもふ露けき月のよにはゝの

やみきえの風にみてるもと

楊柳のみとりにくまて青柳のいとゝ思ひてみえけるを

春雨のふるにまかせて青柳の花の露をとゝめもそめける

世の中はひとつにかへてなすまゝに移りゆく

よの中は我をはなれて世にひろく風情をかさねむ

人をみまくほしき

かよふ人きはめて稀はおとなひてを待ちとも知らて人をこそうらみん

つらくなる世中の人事

今さらにおもひなる身と思ひすてつゝそむく人数にもなきをきゝつる

ゆくすゑむかひさためてこのおもはれ哉

あるましきとゝものうくなるひさしき世のすてさせる人

さらにもしられぬをとふ人のえたるまことにみてくれなるそおとなえぬ哉

世をとのまちてきゝしにたえてかへりさる

（風雅）我かひとつのみならぬあはれさそなきあらしもかくやといふ袖のふる

後宇多院よりこゝろさしおほせられし

のち迄もおもひおこせよかくしつゝ世をはかなみての世には流ぬくにるもあきらむる今

はる逢て[illegible]ちらぬ[illegible]世をも[illegible]

鳥[illegible]世の[illegible]れもの[illegible]

いつはりと[illegible]世中[illegible]

花ぞみる

さくら[illegible]

後二条院の[illegible]

よみて女院（西華門）より[illegible]

返事と

（夜業）ちる花を[illegible]

侍従中納言（為藤）の家にて人々[illegible]

春残雪

山ふかみ[illegible]

花似雲

やまたかみ[illegible]雲

薄暮帰雁

（千聞）春さむみ[illegible]

[illegible]恋

[illegible]

[illegible]海

秋月[illegible]

よ河にすみ侍けるころ霊山院にて生身供の式をは
かき侍しおくにしるしつく

（続現葉）うつしおくふてのあとにもしるきかなきえぬ心のあさからぬ世を
わちうるあかきかなおもひをそてのうへにそへつゝ

法程よすむ山の月にならふるあかきかなせよ雲もかゝらん

堂供養ありしに永仁五年公世卿二位の家の大乗経
く廣らせおはしましけるに第五巻かけるのなかにきて

釈迦くにに我ことはなれにし世まてそのみ法に松の緑の塔
ところきはをたるの雲霧にくもりぬるまてそきえぬとゆるも
あくれはそかすてらるよ

松せ我たもぬことみときかへるかなしそのこゝろ我程をそなかる道
あつまりし我程はまつりきこえ我はそのゝ山座におさ
めそ後のよのえた事のはしるまてれわか山を
さるまても宿る月もはつくし侍らし

（続現葉）法のちひかりも無量山辺我来てこれ数きこえしそのみちあすよ
よみし　延政門院一条

（同）みな流よみを落まいりきしそのさきにあこのさまに
人々をとて遊びて佛事あさいりてしも
さるへきてあきし後ゑもたゝ花梅いまつ深きゆるふるを
あはしかまるほ侍し小清閑寺にまつとらよりて道

我俗拍子にあひて秋ちかうなりまさりてくるしきより中将の
うはそく博
かきならしたるはいろちまさりてあかつきあはれ嫌もとめて鍛の音の
まつ
海つ
いとも儘のいろちまでなきくれはわ嫌もちゐるたのこ旅れ
みちるそ上の孫ちる
叢風かうしうつくしく流もきこえたるかへしてくるまへ年の筆のおもてよ
あつもまてやうちあふるまよりあつめの山乃にちかう
なにことも
知らそおもひやるまてなかの程を経まての正おほいまうちきみまたも

うみのおもて乃にのうみまつきはめあはれあきらかを
又ゆきうえなにしろおみゆくて俤みのこゑもゆかしさはなのうち
あるかきの宮と申すところにて居後して
こよのはきみ儀のましきところへすゝみ八月に聖天宮虎
むさしの國の程にいらへよ扇にまつりてしづかに参りて
さあまてうちよ楽まて月あやうき歌
故郷のあきちかのえの露の宿もかきこえむやう旅月のみ
きうのえ乃塩ちつの河といまたつ旅そそあふれことにあつ宕
旅く身ひとりむすえてかきひの此我
いふほのたちよの自ちうちまぬるて風まて旅寝そ我かさへ存候

きくのみゝせきもりもそ

よそにみた信ものゝふのたつ日は関のあちこちに吹れ松たち
　なきころかな

田子の浦あまのやくしほの海にかけて浪の手風のふくによる蜑かなるよ

下もせ夜よいまはて行の山もえてこそ見なるはかくれ

まゆりとするあめやしれはわかまよかちつまち待しそこ

乃そひきうたいかまゝのみそ猶い

一夜待つかぬ風まろ屋のあともみえし夢うつゝ行きのうち濡乃山え

けふもあらぬやうなるよそのこぬまゝに

とあくなるつまれつよりのゆきたえにはかひもまたれ山ほともうね

なふるくあかみれとて松すそなうち世かぬるか我身かるれ

山里の秋さひしき風まくら合はらよりかのひとすそらて世まちうらみ

うらく旅ゆく人ま捨てゝけるへくゝよかへりまて

人めのみ冲とは身なりもまちまち過れぬる月日ふつかゆるまん哉

文

身の方のそてにふかき思ひなそのふ文うちとけぬの水風まなるべく

絶切恋といふことを

我なる遂てなきこそ身もあひみしよそのもの我身也けり

寄雲恋

峯はまた風まち北て靡く雲の手はてまゝすくるまひのそ海

うみのうへにいさよ（いさよい）ひの山の端にはれゆくかゝやく立別れかた
とまるたりみのうへにいてゝゆく雲のあとなきかたのはるかなるかな
まつもよそにみえし月影の山のはにせかれしまれし海のけしきはかな
かのえさる

はるかなる花ひとえそめてさそはれのえさる夢とるさめてこそ
五月廿日ころ花山の中納言家の庚申にて
郭公声稀　山田早苗　閑中五月雨
深夜夏月　風前夏草　螢火秋近
ほとゝきすなくねあまりこそすきゆくやさ月の日数かさなる夢
水こゆる田のものはるかなへとりてはるかに山のかすみそわたる
まてしはぬひのうちかなるあくまてもよにふりすさむ月の影かな
あまの海もみるめのとゝひまちかねのなほなつの夜の月をそ
うは玉のよるひく草葉すゝしく夏の月のかけうつる風そふくなる
まつ人のまちかねてこゝろに雨のよのまゝつらきかなしみてん
入道大納言（為世）家にて九月十三夜歌合に月を
あくたふまとゝいふへき哉
まかせ海のうらなみのひまのかけもくもらぬ秋の夜の月
恨絶恋
いかにせゆくすゑかけてちかひしもさうみゆかしく思ひそめける
いつはりてたのみしのみそ

しる人なき秋の川のこ夜にかたらふ月の影をあはれと神やまもらむ

しつの人も書ちりて

秋山のすその草の露にやとる月ときけは藤かくれなる

山家

山かせのたえまも[illegible]夜とまる[illegible]風おとせぬ山にてやかて[illegible]おもひのかなしきにふかき[illegible]かん

後宇多院よりえらはるゝ歌ともめされ侍りけるついてたてまつるとて信忠道我にかつけて侍りける

人をまつ[illegible]ちりてたにさくらの[illegible]風にちるらん

忘しをまつ心

おほくの和歌のうちにえらはれ侍るよしうけたまはりし

神無月のころ世をのかれて侍りける入道大納言（爲世）のもとへ

わかみちはたえすそつたふ[illegible]この杖は

葉のすゑかけて世にそみちもそれもえらはれ

なきをさためてまつるとて

世にしられぬみちをくみて[illegible]山ふかく[illegible]はなれし

あつめし

おなしえの和歌のみちにつけてみちを[illegible]のことの

（後醍醐）正中二年春よりうた合のことめされ侍りしに

山路花　　稀遠悪

まても又ゆくて風よやとるらん谷の山かけ[illegible]袖の[illegible]

いつ[illegible]いるさて[illegible]今て[illegible]も世[illegible]らん

民部卿（爲定）家[illegible]よみて[illegible]

あるしよ

立春

[illegible]霞[illegible]ひくあつさ弓[illegible]の[illegible]たちやそめけん

若水

つきもせぬ君か八ちよの[illegible]にくみかはりて[illegible]春風[illegible]の水

早蕨

いまも又[illegible]

帰雁

[illegible]の雲[illegible]

感花

[illegible]

初郭公

[illegible]

五月雨

（藤葉）[illegible]

泉

[illegible]

蘭

ふきつきのさそふ風に露落て枝にとまらぬ葉をしのこる色ならん

駒迎

いつしかとはやこえぬらし逢坂の関のもち月の駒

松虫

秋寒き花野の露のちよや松虫のなくねもあはれに絶えぬらん

漁火

ほのかなる火のあかしはなみとともにかすかなる小島のうちやこさるらん

網代

冬さむくいさよふ波にさえまさる宇治川のあしろ木

寄雪恋

ふる雪の跡のしたをれわかひとりあまたのゆめやたえしの網

寄衣恋

きえかへりなかすもおなしあはぬよのさよ衣かへしいまはうき風のこゑ

寄湖恋

にほのうみやあまのもしほにすくふ風しらぬまになをそれぬ沖のつりひら

寄野恋

露しけきあきの草葉にすゑむすふ秋風のちたれ野へのかれ

寄橋恋

あまさかるなかそらにたえしおもひかはのなかのかけはし

延政門院一条

頼みつくしたるまてあやしきさを絶えし

たちいりまてのしけみかたとて
昔も今も遁世修行のすかたにて昔人の袖をなをしける
ありて
世をのかれて心にいくる世中人の遁世はうきわれとまねのこゝろ
詞花の山まては同十月あまりになりにける紅葉みて
今はうき花のさかりにあるまじきものなれば遁世の春なんなき
人はこの世をしはすてゝころもあらさらん人のあやしきまて
なをうらむ袖のよそになれはてゝもいかにとかあらう
季節遁世をひてこそ人々もすみなれけるをのこれゆかしさ世すて山路を
されとも人のなかにあるとはいふとかしきらく

出家とはこれなり一首の人をまつる人ちかきおほかえける
いはかねなれはおもひやる時もあるらし
あらそひこの山のみちにぬれたる遁世つるかく人をまてもなきかな
時雨の秋なれはのこりもとたてて
おなしやいつ遁世修行のこゝろはまかれたれと秋いすくなる身哉
と思きるものへゆくへしは鏡をとて
山の遁世をきて涙よちるそて袖はいかにそれなきる旅まて
藤原行朝すゝめ侍しかは社にて
なくさめのなきまゝ遁世たらくるまとわかすて旅の人になりぬるかな
月やとる露の庭まて兵部ありてもくその山田秋のまこと

風さはく尾上のくもはこゝろあれはかくれもやらて雪かとみゆる

こゝろにすみてかくもたのもしとおもふにつけてそ社のちかひ迄

あふくやはてる神のことはりもおもひしらるゝ神ならぬ神

かすかなる露のまことはたのまれはちかひのそこもうかひて月を

うれしさのみとゝまりて身ゆるすましける人の道をもかな

歌の一字残さすこゝろをそへてけちえん経の歌すゝめ

侍しける文字

流轉まよふ宿とそとめとなりぬへき偏の事にもあらぬかはん

おそらくは往生すへき手にあるとさくかくさて

あかつきあけむとしけるほとのうちにもさたのまちにて涙にそうく

名ある月のくまとはいはしわかくして

いにしへもしれるらんのちの世まてそうゐのしるしにうけつくらん

宇治の宝経蔵の流あまたときゝて人のゆかしかりし

うつませんかきりの世の中にもかくあるへくそ末法やもとそこせよ

流我つくりし経のつゝみとてうちよするそ又浪の花と

いつかたのまてかくもとまりて

すまゐも又数ならぬて世の中にあまたなかれて露やてくる

鹿島の宮よりみちよりかなしきをもとめてたひゝとゝころ

いにしへも紅葉してきりくもかゝるにまかせて色かはる宿の紅葉

九月十三夜大覚寺（寛喜る）二品親王よりめされし三首哥

同寄月待恋

高砂のをのへ我出る月ならはこゝろの松にさく哉の秋は

夜来甚帳ふけゆくまてあまたれし寄りのみしゆ

よる雪よみちて世侍る也山居しけるをおもひやりて

とはいてつもる雪をなかめしよる雪はらふ風吹たゝもかすまし　尊胤二品親王

からぬの空そへて歌つかはしけるにかへし

をみるもしのさむきいそのなれは言の松の浦にあらん

正月十二日春に同日民部卿家の庚申に早春雪　為定

あわれともみる浪のたつ雪のあをさくる空の色やすめる

梅間鶯

きゝそむる梅か枝の雪のうちに春をしらせてなく鶯のこゑ

暁別恋

歌よくの名残りにまさる有明のつらさをしらぬきぬ〴〵の露

夕旅行

おもひやるこの行末をたのまれぬ道のゆくての夕暮の雨

寄神祝

ちはやふる神もしるらむたえせぬ世々のみちにあふ君

先坊御時御歌合によみつかはし　立春元亨二年

乃春によや

春たつとけさ年もかすみ浪もかはりぬ君か代の春

おもひすてゝちもいつくそとさためけるはなはちるらむ人そとまほし
こゝろある人のいろあるもいとゝ袖つきのかをしたふ風のあらしちらし散れ
我かたのそらにうかれて風そよく秋をまつとてはなちるとはなるかま遠哉
たゝならぬ霞とゝもにみよしのゝ梅もにほひのちりはなすかまつ人の春
　聞もしらぬ花のかよりこそ梅のはなそし
みな人は梅をもてはやし柏てもまさるはなをまさる花のいろか
　まつ咲花とたつねぬ
いはくらのゝみねのさくらかねとにほひませてらかすにはるかな花のちるへき
　かつらきの山の花
まつらさきや袖の色かもこゝろあるかみにしるへせす日暮の色ゝ見るへし

　池に花のうつるはちりたる哉
霞ゝはれとも花の散筆に染めつゝ書くらき流れのうきかな
　海邊の春曙といふ事を
花さかぬとも見る浦もかすむ日のうらゝの春の霞のあさなれ
　洞院左大納言家にて春風春山霞
みなと河霞にしものなこりにやゝしらぬ波の音さへかる風
花はたかき花のかをにほひにしもおえてうつはる山の雲
またみね風もにあき石川もちもみてのさと深き霞やさの外山
　建武二年内裏にて千首哥講せられしに題をさくりて
まかりしてよみてたてまつりし七首春植物

久かたの雲ゐのそらつに出る月もきよきひかりはちかくなるらむ

夜動物

ほとゝきす鳴とをつまへて神なひのもりに杜とまるよしあるゝぬ

秋天象

よもすからゆく月の影さえて天の河せや猶こほるらん

冬天象

霜さえてやゝあさちはかれてふくも雪のはかなかりけり

恋天象

あまのはら星のきらめくちら久方のひつきせぬ我袖ぬらすらん

居植物

いたつらにすきぬるよをかそへても猶こそ身はつもりてくちやそまし

雑地儀

世をしのふならよ風のおとこそすまひする山した風は今やみゆらん

大覚寺の滝殿のといふあれたるをとふ人のなを
尾十月くるまをとゝめて日をとかくはかりしてわかれぬるに
ふみて山路にふかく尋入のおもかけ猶きゝつたふるを
うき世のこゝろをかのおもかけ猶恋しく袖やこのまさらん

みつとう成

芦のやのかたはしかも風のひよ涙こえてくてやな霜もまゆやうらん

ある人のかへるそのおもかけの歌よみしま

山路乃暮天の雪

よしの山ゝ杉の嵐のさえ〳〵てふきからたくこそ霞な

野外冬の月

冬の野ゝのせまさひく草もかくれなき霜夜の月をこそみよ

海のかゝるまろちとせ

難波かたみちくるしほの風さえて葦の葉さやきてちとり鳴（たり）

連夜待恋

あはれ人のたのめをかけていく夜てねよはのとこのことにまよふ也

それとてのちあかつきのおもひ

なかめつるうひゝるめのまち合待よう人のきなさるるなる昔（くり）

ふ庭のちりしぬるさく

秋ゝ野ゝのたまきぬるにあへすそらもうつすを冬はまつれは（ひて）

今迄ていつく煙たちのほるときまのふ嵐乃吹ふ冬をしあるらん

秋くるゝやすらひのゝあさの庭をしらまくかきとらぬもみち葉ゝな

大おの

すむ月の影そよとあかすの河なみにうつりてもあかぬまさる泊の不

みよし野の山よりおちて瀧乃糸の（もイ）たえすそくちかなる哉

雪

ちとり梅ゝ枝の嵐も高くて夕のとこゑは清ける雪哉

あさこのよしの乃さとのいつかゝる

朝まつ代に出るらし越記る世をさらくみゆる乱れな哉

山田小水まうしゝと

せきとむる春のあらたを田うち返し水はゝすに流るゝもはせね

たまらくまもあらぬ比にて侍るをとひておほせ侍しを

新中納言へかへてさつしひ給しそ

かたちくりよりく風なりさる成なる中に清のまてはこれおもへるそ（きよ）

いとゐるふかき花はむかしとうみはふかくなりまし

あつし

今やきつらみなれの日をとも見ひろくふかくもけ也（とく）

自成るまゝかゝりしくやもてきくみえるなと

さるとけの中将入道乃許にまかりて逆修の結

縁経乃うち随喜功徳品の世皆不牢固如水

沫泡焔

うき世をは思ひたとふる水の泡のきえぬるものはを世とはかな（ゆめ）

基俊すゝめ侍しあまた経乃うち

いふ文よりつきにのわつかもむこれなほ世になれとある月を

懐旧

あきらかのむかしを忍ふよたゝねをやつしそ月日をさかるらん

月をみて

なかむる涙よ月の上にはなるゝむかしのこひしさを見て侍る

花よりもひとこそあまた[illegible]

春乃日の[illegible]はなくとなくさめかねて花をみるかな

山吹

[illegible]いとゝ[illegible]

菩提樹院の[illegible]よめる歌

[illegible]の[illegible]とけて[illegible]

たか[illegible]

と[illegible]ちりくることそはかなけれ[illegible]

ちる[illegible]の木井[illegible]

[illegible]の[illegible]

清遠[illegible]

浄妙律師[illegible]

[illegible]みちのはる[illegible]

[illegible]の[illegible]乃家にて[illegible]

ち[illegible]

通智院宮[illegible]

よみ[illegible]の春[illegible]

いくとせの[illegible]春[illegible]

[illegible]の[illegible]

さくらも[illegible]の花[illegible]山里

はつかなとより小ふねにのりて唐崎松のもとにまかる
夜のゆくるかれのこ海のけしきうそおはれはむつるもとゝなるなかのなみの
あれ中のうきたるかもよはせともまことよのなかにゆくゝるらなと
たえてのみなみの山の端によりてなかむれは我身にしらるゝ秋のゆふまて
末のあまよりまよひてそのひやかなる露ならし袖のうへの月
いこまの山あらしにようこそゆく雲の絶てそ有明のふる時雨哉
霜枯乃への風にさそはるゝ露乃枝にその朝かほにのこる月影
また我かふるさとの空やのかにおもひやるらん今宵なとをとまりて人もなくなく
はかなしやいつくをさして身の程をあすとも人に契るその世のかな
関ある所まてをゆきかよひつゝ夜はふかきをこまてとめて地蔵乃古堂
やみのとめさせて名所の鏡山いさ見てゆかんの京
浪よるいつ海の辺に浪まてもふるきよはひ契る
女ふつのえきむとそ人のいふ海とし
あふせやあたりそこまてのむかれはうかひすまる迄たゝねをを
あく迄とつひにいつならはかなかるへきをすまる人にはゝかり
けりん人よ、かくるとて
まつの光はてゝそれなくあくまなまふかくる月我かなりつゝ迄は
煙の空なるとのなくまて人ものかゝるしてゆきて
有明の月か雲つゝよもの光かゝるゆふはゝきゝもみちの枝なかん
あふさそのつこのまとあく迄あるあまくもなかひつゝきて

うらも浦も旅まねかの旅のもとゝていひかそく
春ちの花の旅の空きみなれゆかはてもひとつまとめやとらん
ならわすき鐘の音きくもきなれしか花待堂のはしめよめし
なすまゝ人もとふらひて
とく過るそあらしの音もれつとめて今そうき花名残おしき過

夜のすから雨もふるまゝに音をまよへることねもられさらん
あくるまて過ぬる夢いかにそうち払ふよするかなるうき人
ゆかりそれと

はるかなる花のかゝるこゝち帰る雨の月の夜風ふすま袖いかに過て
みともはなの夜の花まかの里はなる雲のゆくへは涙ふりの恋

山寺に参籠してかくなむよるまたらぬるこゝろそ
乃中よりのうき世をいとふのいと旅にいるは物かなしく
て人のすまゐいとゝ闇きうやなすみ集の旅ひ
かすみ花散ぬるてふ空のあはれやとみゆるも哀にて

山さとにひさしくありて旅ねをそしらぬ人へとこそ
たすねかもかくあらしにおもひて
うき世とも思ひしる世の世中をいとふ旅ねの夢か今さん
いつくにも又ひきうつす過くなやとおもひすゝ今いかに
あくるまて海の世たに世をすてたる世の中の
まよふ身いつすみかとも花ありける旅をそつきやうきものみぬ

よの中あつまりくるもあはれにはちりつる事てなき迄

こし人のかはらぬものとことし哉

かくありきかのほかはまれなる海をこえなりしはなのたよりも哉

あしたのつゆ

霜こほる秋はあさたにしもはさそふみをはるとも思ふ

いさよひ

かくなる空のまさこそや世にあるよしはよにもふるにもなかなかにあらん

春月

秋もなしかすみたる月の数つつもりに言なや今はふけぬらん

はやけれはいかなるよにもかきくもりなきあとかさなれは乃春夜月

山さとのさひしきなる哉

身をうくるとも山路のみちもともに人の心にかはれかなる

世中あるにまかせてよそにこそみえしもたゝくなりけれ

とりけりしん中納言よの手

世をいとふ人のせきもる家の風なきかにかはらすかはらぬ影

平貞直朝臣家にて歌よみ侍りしに旅宿の心を

草まくらかりねの風にみちもなくそなかむるもの哀そ稀

なかひきの文

いかすかなぬともたきの雨ならつらひとつもはれせてもさひやきなるを

かかるなかの身にて世はのつゆてなにし哀なる人をおもふ世かなれつら

思ひよりゐてはうたかひなることひとつの事成

さもはすれとはかなき月日もとゝめかたく人のあはれの猶その夜

身ようせひてすきひつゝきし

風すさふ竹のそよ山の秋風月のよらふすまぬ世に出てたる道

なをひとつおもこゝろよふ綴えけるみちをもことあをの嵐の夜風

身を捨てくひやうのうふかれたるのすゝきを思ひなから出ふけるらし

ほのくきなるさきぬゝきよのふるかふまとく人の世を

なをき衣ゐさき衣手のなみのまつ新玉所へ不桜なるめ

いつまてよそにかなくてとさ行さひしくそ猶のゆかを

山のかすみゆかぬる雲そのよそにきこゆとのみ出別れてしのあらん

又もこむ梅をいつたのむるゝ過る海まつ袖の香乃やまよ雲

にほひめておもひきつゝとぬるさるに霞乃こゝろもへなる尾上の様

和歌所にて初聞鶯といふ事を

きくからに春その心もまさりけり谷よりいつる鶯の声

身にしみ山乃花見んあけましに

あま人はなはさそふたらく春日の山路の花盛みなる

朝まふふちらそ書風なへて今の時てもみとなるまま

花乃ちる影を

梢のかなれそのつまるまも涼そのあさなかくるらん

人のうゑまの世しけり

いはねとも秋の風露散袖にみやこさへたよりそなかぬらん
久しくもとつまぬ人のかりひやまし

花さえの色ともさらぬ月のすさひにさそはれやすくうつりぬる
よもすからのこそ世のありゆくき末をと深くそ

あひと世ひやなく浅からむ我身は河の浮世なりとく
雲しく絶てのあはれなりける母のうへ清らくとなへきまゝ
とそ人のよ庭を待し

いはくるへは違へたぬそれおなしのさおそにゆつりぬ事もなける
おもふ人にまたつうつしける

まつかたのは猶我世へわりそそたのみし人はつれなき

冷泉乃大納言殿にて歌合に夏草

しけりゆく夏のゝのまの草のなかゝえもからぬまての人の下葉のはてはしらるる

不逢恋

おもひ世にいはけなくよなれはあさはかに人の庭の逢てしも

述懐

よしあしはしりけむ身のやまひにも河なき人をよしくやきそら此世をかねへ

中納言家歌合に依花待友

はなさかは人をたのめし人のまたえぬやよるまてはのみ花をまたなみ

祈不逢恋

たのむかな神のちかひの誓ひのかつらはそふ道にはかりき祈る

寄草恋

時とさへ人の心はしらねともあやめ草ひくてにあまる根をそなかるれ

小野に住侍りしころ

さびしさにさびしさそふるすまゐかな人は住まぬの月夜の山のおくそゆかしき

折句によみける二字

山人のいりにし跡はかくれつゝたつをたのまぬ袖をさへけり

寄道法師の家の歌合に晴天帰雁といふ事を　建仁

晴わたる空にかへらぬ雁のこゑたつ霞にもまかすなかりけり

兼覚親王

北の方失給ひて後二のとしのはてにあはれなる事ともいひおこせて侍りける返事に

西林院の宮より、よしあるさまに歌よみてつかはせ給ふ

五月雨

降りしきるよるひるわかて五月雨日数ふれは雲のかゝる比

青蓮院二品親王よりとはせ給ふ花契多春といふ事をよませ給ひしに

君が行のこるへき花の千世の春をいくたひとなくみまくほしけれ

雪月花の山のさくらの

咲ちらむ枝のこゝろはかなしとて思ひかへしつ花の雪

花のさかりにたちよりてみるらむもいつまてかあはれならむ

あひて

夜菜

いかにしてよしのゝ山のさくら花にほひをとめて秋をまつらむ

故大納言とのゝ松のおもしろきにつきて侍て
見送りたてまつりて山さとの花を
人あまたひかへるとも山里のあるしもまちて花残みるらむ
花まちて夜をそかさぬる
よろつかやさしき世のまかせにまかせて歌よみ侍りしに
前摂政家へ十月の歌権大夫侍りしを聞て
みきりなとよのつねにて歌連歌なとしけむことゆゑの
人の申さまたなりたれは申しけるむかしの心ちして
雨もふりめくるやすきをみる雨の
しれはよのならひを見て清見かたを見つるまゝとなりつれ
くもらぬにうつしてかけまくもかしこき神のちかひありて
聞きやつめくまれつるは
かくれたる梅にあらはれてまてそと申す

忍絶恋

世にもれはいかにせんとおもひても心をもしらぬまゝなる中空

懐舊

はかなくて又こそ袖をぬらしけれたかひのあるむかしなりけり

千鳥

しほ風のさよ千代の浦あるゝ風をまつとさへぬ千鳥なくなる

網代

127
666
1

しる人もよそのこゝろのあはれをもなかりしとこそおもひしらるれ

落葉

のこさしと梅ちる杜のかみち葉はちりはてゝひとりかゝるかなりけり

春死にし人の哀傷

こひ人の涙はおなしき月のかけすくなきのみならすひとりもとめし

みし人もなき花盛よにふしてをみるにそ袖のぬるゝ哉

うつりゆくわか迷ひさそふためしにはうらみしはなもとはんとしける

よみつゝ

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

帝國圖書館藏

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用